

他者への empathy を育成するグループワークの実証的検討 —教職論の授業において—

村井尚子
(発達教育学部)

1. 研究の目的

教師にとって、自分の視点からだけでなく、立ち位置を子どもや同僚、保護者といった相手の側に移して状況を見遣る力としての empathy は極めて重要な要素である。筆者は、教員養成課程の教職論の授業において、絵本や小説、映画などを題材として、子どもと教師のかかわりの場面を分析するグループワークを行っているが、この取り組みにおいて教職をめざす学生の empathy の育成を目論んでいる。

仲島は、日本語において「共感」と「同情」という語が時代とともにその内包を変化させてきたことを辞書、辞典の詳細な分析から明らかにしている。「同情」の対象は他人の「喜びや悲しみ」といった境遇や感情一般であったが、戦後になって他人の悲しみ、苦しみに対して感じるものへと次第に変化していった。「共感」が辞書に初めて取り上げられたのは1949年の『言林』であり、1920年代頃から使われだしたと分析している。さらに、英語における sympathy と「同情」「共感」の対応関係は一致しておらず、empathy については仲島の分析対象とはなっていない¹。心理学では empathy を「共感」と訳している例が多いが、以上のような視点から、本稿では日本語に訳さず、原語のまま使用する。

英語において empathy という語を初めて心理学の領域で用いたのは empathy の最初の科学的理論の父²と呼ばれる彼は、リップス (Theodor Lipps) であるとされる。最初は美学において用いられた Einfühlung (感情移入) を他者の心的状態への理解に適用した³。さら

にこのドイツ語を empathy と英訳したのはティッチェナー (Titchener) であるとされている⁴。

現在心理学的には、empathy に“他者の感情状態を想像する”認知的側面と、“他者の感情を代理的に経験する”情動的側面があると言われている。「自分達が遊んでいる側で1人寂しそうにしている他者を見た時に、“悲しい気持ちでいるんだろうなあ”という”認知的側面と、“自分自身も悲しい気持ちになる”という情動的な側面」とである。

三國は、ロジャーズの「《共感的理解》(empathic understanding)」を説明する際、「人の靴を履く (put oneself in someone's shoes)」という語を用いている⁶。この比喩は「立っている場所を変えると見えるものごとが変わる⁷」という現象学的な考え方の基本と通底すると言えるだろう。

左の図は empathy を、右図は sympathy を図式化したものである。Sympathy は「共に、あるいは同時に」を表す接頭語 sym とパトスからなり、「他者とパトスを共にする」と訳すことができるのに対し、「外から」を表す接頭語 em とパトスからなる empathy は「外部から他者のパトスに入り込む」と訳すことが出来るだろう。すなわち、sympathy が他者と同じ位置に立って、その感情状態に同調するのに対

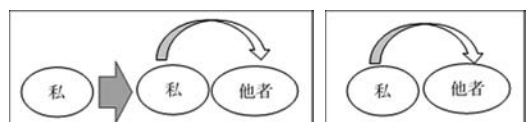


図1 empathy と sympathy の図式的比較

し、empathy は、あくまでも別の立場にいる私が、他者の立ち位置まで自身を移動させる。ただし視点の移動という言い方では、あくまでも認識のみの移動を指すことになる。立ち位置を移す、つまり仮想的にであっても身体を他者の傍らに移動することで、自らも他者のパトス的な情動、感情に自己投入しよう、あるいは無意識のうちに投入しているというのが empathy のあり様であると言える。

本稿では、グループワークにおける話し合い、ポスター作成の過程において学生達の立ち位置がどのように移動したのかを発表内容と3か月後に実施した振り返りシートの記述内容から分析していく。

ところで、empathy の育成に関しては、尾之上らの児童の共感性の育成を研究した先行研究、教室の中での生徒たちの empathy のあり方について哲学的な見地から探究した Garrett と Greenwalt の先行研究が見られる⁸。しかし、教員養成課程の学生の empathy の育成については、管見の限り先行研究は数少ない⁹。この点において本稿は独自の視点からの分析を行っていると考えられる。

2. 研究方法

マックス・ヴァン＝マーネン (Max van Manen, 1942-) は、その著書『生きられた経験の探究』において、言葉の語源を辿る、慣用句を調べる、自分自身の経験を記述する、個人のライフストーリーをインタビューによって手に入れる、(参与) 観察をする、文学作品や伝記、日記、芸術作品などをもとに現象学的な意味を探るといった方法を紹介している¹⁰。また彼のアルバータ大学の大学院では、映画を題材に用いた授業も行われていた¹¹。

本研究ではこのうち、絵本や文学作品、映画などを対象とし、「子どもから見た子どもと教師の関係を探究する」というテーマを設定することで、幼稚園・小学校教師をめざす学生から子どもへと視点を移し、子どもと教師の関係のあり方への探究を通じて、empathy を育成することをめざした。

具体的には、2016年度後期の K 女子大学の幼稚園・小学校教員免許に関わる教職課程科目「教職論」(1年次後期配当科目、101名履修)において、絵本や文学作品、映画などで子どもと教師について表現しているものを一つ選び、そこから一場面を取り出して、その場面における「子どもと保育者、教師」「子どもにとっての保育者、教師の意味」を考え、共同でポスターにまとめ発表するというグループワークを実施した。

表1 子どもから見た子どもと教師の授業

回数	日時	内容
第2回	9月23日	オリエンテーションとグループ分け、進行表の説明と作成
第3回	9月30日	途中経過の確認
第4回	10月7日	発表の準備
第5回	10月14日	発表

オリエンテーション時に5から6名程度のグループを作るよう学生に指示し、分担と進捗状況を管理するために進行表を作成した。発表のテーマ決定や素材の準備、発表内容の検討などは授業時間外の課題とし、第4回の授業をポスターの作成、第5回の授業を発表に充てた。なお、授業に際しては趣旨を学生に伝えたくて実施している。発表ののちに、「振り返りシート」および「子どもにとって教師がどのような存在であるかを、具体的な事例をもとに論じる」というテーマでの論述を求めた。

3. 結果と考察

3-1 選ばれた素材とテーマ

子どもと教師の関係について描かれている絵本や小説、映画の一つを選ぶ、という課題であったが、結果的には絵本を題材に選んだグループが大半であった(表2)。映画やテレビドラマと違い、持参してグループ全員で手に取ってみることができる大きかったのかもしれない。以下に発表内容と学生の振り返りの分析を通して、学生の立ち位置がどのように移動しているかを検証していく。

3-2 立ち位置の移動

それぞれの発表内容と振り返りを分析することで、学生の立ち位置の移動を3つの類型に分類することが出来た。紙数の関係上全ての素材について分析することは出来なかった。

①学生の立ち位置から見た教師

学生の立ち位置が移動せずに、学生の立場のまま教師像を見ていると言えるのは、いずれも実在の教師を扱った伝記的な絵本であった。

・『ありがとうフォルカー先生』

学習障害を抱える女の子トリシャはなぜか勉強が苦手です。つらい思いをしているが、新しい学

校で出会ったフォルカー先生に字の練習をしてもらい、字が読めるようになったことで人生が変わる。発表では、トリシャがフォルカー先生と一緒に字の練習をする場面が選ばれている。「親代わり」「親身になっている」「自信を持たせる」「その子に合わせた指導」といったキーワードが出されているが、いち早くトリシャの苦境に気づき、時間をかけて丁寧に対応しているフォルカー先生の指導に教師としての理想のあり方を見ていることが分かる（以下、□の中は全て受講生の振り返りシートより）。

表2 発表に選ばれた素材

素材	形態	発表のテーマ
天使のいる教室	単行本（宮川ひろ作，ましませつこ 絵）童心社，2012年	元気で優しいクラス作り
ブタがいた教室	映画（前田哲監督），2008年	同じ目線で学び合う教師と児童 ブタがいた教室における子ども達と 先生の関係
がっば先生	テレビドラマ（2016年9月23日放映 日本テレビ）	話し合いの重要性
暗殺教室「カルマの時間」	アニメ（フジテレビ）	信頼関係の築き方
ともだち	絵本（太田大八）講談社，2004年	この場面から考えられること
くまのこうちょうせんせい	絵本（こんのみとみ作，いもとよう こ 絵）金の星社，2004年	生徒の立場に立って考える
コルチャック先生—子どもの 権利を求めて	絵本（フィリップ・メリュ著，ペフ 絵，高野優監訳）汐文社，2015年	信頼関係
ばななせんせい	絵本（得田之久文，やましたこうへ い 絵）童心社，2013年	先生が与える子どもへの影響
えんそくバス	絵本（中川ひろたか作，村上康成 絵）童心社，1998年	生徒と共に成長する先生
フウちゃんクウちゃんロウ ちゃんのふくろうがっこう	絵本（いとうひろし）徳間書店， 2012年	先生から学ぶということ
ありがとうフォルカー先生	絵本（パトリシア・ポラッコ作，絵， 香咲弥須子訳）岩崎書店，2001年	生徒に対する先生のあり方
しゅくだい	絵本（いもとようこ作・絵）岩崎書 店，2003年	家庭と子どもをつなぐ教師の存在
ますだくんの1ねんせい日記	絵本（武田美穂著）ポプラ社，1996 年	子どもにも訳がある 生徒をしかるさいに気を付けるべき こと
教室はまちがうところだ	絵本（藤田晋治著，長谷川知子イラ スト）子どもの未来社，2004年	『教室はまちがうところだ』から読 み取る先生と生徒の関係

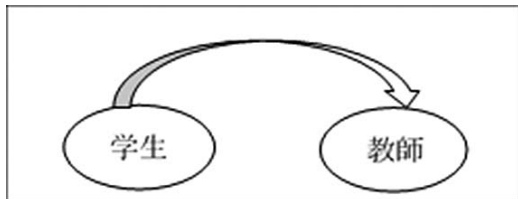


図2 ①学生から見た教師像

- ・教師は悩んでいる生徒を見つけた際に話を聞き、どのように生徒の心に寄り添うべきなのかをこれから考えていくべきだと思った。
- ・教師は子どもに関わる時間が長いので、影響力も強い。間違ったことを教えないように正しい行動をしなくてはならないと思った。

・『コルチャック先生』

ユダヤ人の小児科医であり、孤児院の施設長でもあったコルチャック先生の伝記的絵本である。コルチャック先生は、恵まれない子ども達を集めて孤児院を作ったが、孤児院に来た当初、大人を信頼することを知らない子ども達は悪さばかりしていた。そこで先生は彼らをまず信頼し、自分達で裁判を行って問題を解決する方法を考えた。それは仲間を裁くことではなく、許すことであった。さらに、子ども達と先生との手紙のやり取りを通して、両者の信頼関係が深まり、4年もの間従軍していたコルチャック先生の帰りを子ども達が待ち続けることになった。発表に選ばれたのは、軍医の仕事を終えて4年ぶりに帰還し、孤児院の子ども達が門で先生を出迎える場面である。

- ・信頼される教師となるためにも、子どものことを日頃からしっかり見ておき、些細なことも気づけるようにしたい。
- ・教師は子どもに勉強や規範行為だけを教えるのではなく、主体的に行動できるように考えさせる指導も大切だ。

フォルカー先生も、コルチャック先生もどちらも理想の教師像を描いた作品とも言える。この二つの作品を扱った発表においては、教師の側に立ち位置を移して状況を見るというよりは、教師をめざす学生という立場で、理想の教

師像を見た時に、「こうなりたい」「こうあるべきだ」と考えたことが述べられている。理想的な教師と子どもの関係を描いた素材においては、このパターンが多くみられた。

②教師の視点に立ち位置を移してみる

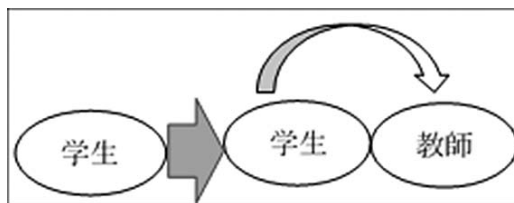


図3 ②教師の視点に立ち位置を移す

それでは、学生が教師の側に立ち位置を移すのはどのような状況であろうか。この事例を最も端的に示しているのは『ブタがいた教室』の星先生についての発表である。

・『ブタがいた教室』

『ブタがいた教室』を扱ったグループはどちらも、1年間育てたブタのPちゃんを「食べる」か「食べないか」について子ども達が話し合う場面を選んだ。1つのグループは、「この場面からは、先生が子どもを信頼しているということが読みとれる。先生が意見を押しつけず、子ども達自身で意見を出しあい討論する場を作り、子どもの思考力を高めようとしている」という主旨の発表を行った。またもう1つのグループは、「この映画では、教師も児童と同じように悩みながら決断する姿が描かれる。教師は子ども達を教え導く存在ではあるが、児童と同じように悩み、考えるという姿もまた教師の一面である」と解釈している。これらの発表には、「もし、自分がこの話し合いの場において、Pちゃんの今後を決めなければならないとしたら」という切迫した気持ちが表れていた。この意味で、教師の立場への empathy（感情移入の意味でも）がこの時点で醸成されていると言えるかもしれない。ただし、その後の振り返りでは、以下のような言葉が出されている。

- ・教師も児童とともに学ばなければならないということがわかった。Pちゃんの今後を最終決定するまでの過程で、この教師はたくさん

のことを学んでいるからだ。

- ・子ども達自身に考えさせ、結論を出させることも子どもにとって大切だという考えが深まった。
- ・子どもと同じ目線で考えることが最も大切、教師がまず子どもを信頼すること。
- ・子ども達が自分で考え、行動することを大切にして、自主性を重んじる。そうすることによって、子ども達がより成長できるのではないか。

振り返りの文章は、Pちゃんの教室の担任教師である「星先生」の立場から、一般化された教師観へとトーンが変化している。発表の時点から3ヶ月が過ぎ、経験を対象化することになったからであると考えられるかもしれない。

③子どもの視点に立ち位置を移し、そこから教師を見る

『ますだくんの1ねんせい日記』は、みほちゃんの立場から書かれた『となりのせきのますだくん』のなかの出来事を、ますだくんの立場から見た日記というかたちで書かれている。この意味でまず、一つの事象を当事者の双方の

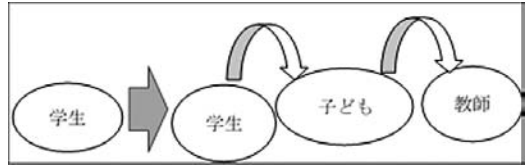


図5 ③子どもの視点から教師を見る

立場から見るという視点の相対化が図られている。2グループがこの同じ絵本を選んで発表を行ったが、どちらのグループも、「ますだくんの視点」にいったん立ち、そのうえで、教師のあり方を見直している。みほちゃんのためによかれと思ってやっているますだくんの助言を、みほちゃんはネガティブに捉えてしまっており、嫌がってしまう。そのみほちゃんの様子をみた教師は、「ますだくん、おともだちにはしんせつにしましょうね」というようにますだく人を叱ってしまう。さらに絵本には、道徳の時間に「おともだち」というテーマでお話をし、二人の友達関係を改善させたいという教師の努力も描かれている。友達になりたいと考えているうさぎの気持ちをトラが理解できるようになるように、ますだくんにも友達の気持ちを理解できるようになって欲しい（トラの立場からうさぎの立場へと視点を変え、empathyを持って欲しい）と教師は願っている。しかし、もともとみほちゃんと仲良くしたいと望んでいるのはますだくんの方であり、ますだくんは最初からうさぎにsympathyを感じているのである。この時点で教師がますだくんの気持ちを理解できていないという入れ子構造が見られる。

発表時には、この3者のやり取りを寸劇で表現したグループもあり、他のグループの学生からも「分かりやすかった」との評価を得ていた。また、ポスターでは「子どもにも訳がある」「生徒をしかるさいに気を付けるべきこと」というテーマでそれぞれ発表が行われた。前者は、3人の思いが通じ合わない状況を図示し、「ますだくん、みほちゃんと話し合っ出来事を把握する→ますだくのみほちゃんを思いやる気持ちを理解する→ますだくんの気持ちをほめ、その気持ちをみほちゃんに伝える、さらにます

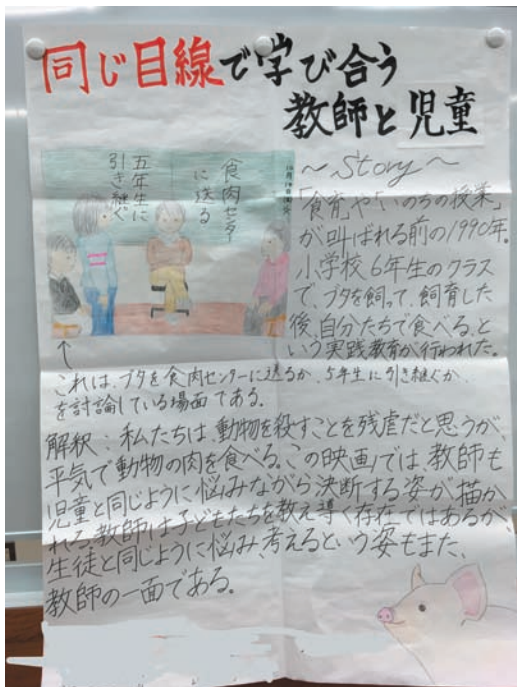


図4 ブタがいた教室の発表

だくんの言い方を指摘することで3人の気持ちが通じ合う」という対応を話し合いのうえで見出ししている。後者は、ますだくとみほちゃんの事例を一般化し、教師が状況を理解したうえで生徒（ママ）を叱る必要があること、さらに担任の影響力が大変強いことを自覚する必要があることを話し合い、発表している。

- ・子ども達が言い争いをした時に、その場だけの状況で判断することは危険がたくさんある。子どもの話を一人一人しっかり聞いたうえで、注意しなければならなかった。
- ・子どもは教師にほめてもらうこと、自分を見てもらえることが一番嬉しい。見ってもらえることで頑張れるし、教師への信頼が生まれる。
- ・子どもはとても繊細で、教師の何気ない一言で傷ついたりもする。むやみに怒ったり、注意ばかりするのではなく、よいところを見つけて褒めてあげることが大事だと思った。
- ・教師は生徒のことをなんでも分かっていると思っは絶対にいけない。

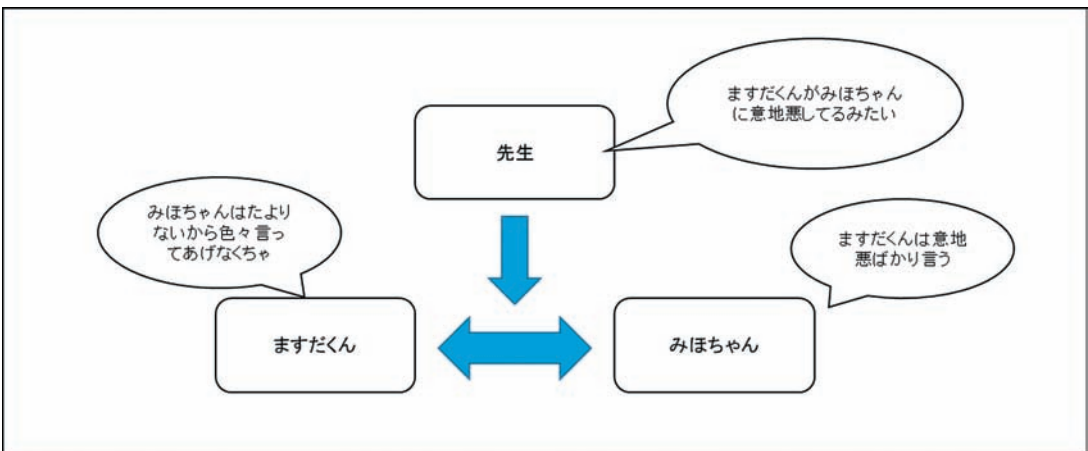
『となりのせきのますだくん』は教科書に採用されていることもあり、あらすじを知っている学生も多いが、『ますだくんの1ねんせい日記』では「みほちゃんが学校に行きたくないと思った出来事=ますだくに鉛筆を折られた」をめぐる背景がますだくんの立場から丁寧に描かれている。そして、ますだくんがみほちゃんのためを思っみほちゃんの面倒を見たり、発言するよう励ましたりしている姿を「みほちゃん

んをいじめている」と誤解してしまっている教師の姿も描かれている。

本テーマを選んだ2グループの学生の振り返りのうちいくつかを挙げた。どの振り返りも「教師になった自分」を想定して書かれているが、②子どもの立場への視点の転換を経てから①生徒としての自分から教師への視点の転換が行われている、すなわち、③子どもの立場に立ってから教師の立場に立つという視点の移動がなされている。ますだくんの立ち位置から状況を見るとどのように見えるか、そのことについてますだくんがどのような感情を抱いているか、について話し合いがなされていることがうかがえる。

・『えんそくバス』

『えんそくバス』は、遠足を楽しみにし過ぎてしまい、朝寝坊して遠足に遅刻、お弁当も忘れてくるという園長先生の姿が描かれている。子ども達は自分達のお弁当を少しずつ園長先生におすそ分けし、みんなで楽しくお弁当を食べる。発表ポスターは「生徒と共に成長する先生」というテーマで、「先生あげる！」と、様々なおかずやおにぎり、サンドイッチが差し出されている場面を描いている。また、「教師」というものは、普段は教える立場ですが、時には、子ども達に支えられたり、考えさせられたりする立場でもあります。生徒と教師というのは、信頼し、支え合う関係であるべきということがこの場面からわかります」と述べられている。



- ・発表する前は教師は、主に子どもに勉強を教えるものだと考えていましたが、先生は子ども達に自主的に行動できる環境をもたせることや、自分の世界観だけでなく、子どもの立場に立って考えることが大切だとわかり、教師の言動や行動が子どもに影響を与えるということを知りました。
- ・教師は一方向的に教えるだけでなく、子どもと共に成長していくものだと考えた。また、子ども達も自ら学ぶことが大切だと思い、自由に学ばせることも必要であると感じた。
- ・教師は教えるだけの存在ではなく、子どもに教えらえる存在でもあったと考えました。園長先生がお弁当を忘れた時、子ども達は、園長先生に何をしてあげられるかを考えました。このことで、困っている人への対応する力がついたと思います。
- ・子どもにとって先生は「見本」という概念があるが、時には子どもから学ぶこともあるという考えを持った。先生が絶対ではなく、子どもの意見を聞き、子どもの立場に立って考えることの大切さも学んだ。

遠足にあたって職員や子ども達を統率する役割であるはずの園長先生が遅刻し、お弁当も忘れてしまうという絵本ならではの物語であるが、この価値の転倒が結果的に子ども達に学びをもたらしたと解釈されている。「園長先生がお弁当を忘れた時、子ども達は、園長先生に何をしてあげられるかを考えました」と述べている。絵本の中には子ども達が考えている場面は描かれていないが、「お弁当を忘れた」と話す園長先生を前にして、子ども達がどのような気持ちになり（お弁当を持っていない園長先生がかわいそう）、どうしたいか（全員で楽しくお弁当を食べたい）、そのためにはどうすればよいか（自分たちのお弁当をおすそ分けする）、を考えていただろうと、推測しているのであろう。この点で、③子どもの立場に立ってから教師の立場に立つ考察を行っていると言えるだろう。

また、教師が教え、子どもが学ぶという型通りの教育観をもっていた1年次の学生達にとって、「子どもにもまして遠足を楽しみにし、遠足に遅刻してお弁当を忘れてくる園長先生」の

物語は、この型を打ち破る破壊力を持ち得たとも言えよう。「子どもと共に成長する」「子どもが自主的に行動できる環境づくり」「子どもに教えられる存在」「子どもの立場に立って考える」といった記述が見られる。このように、教師と子どもの関係性自体を再構築する考えも、これまで生徒という立場であった学生にとっては新鮮なものと思えらるだろう。

・『くまのこうちょうせんせい』

くまのこうちょうせんせいのモデルとなったと言われているのは、命の授業を実践し続けた大瀬敏昭先生である。こうちょうせんせいは、小さな声でしか挨拶できないひつじくんを注意するが、ひつじくんは家の人が怒鳴り合う声に怯えていたために大きな声が出せない。自身も病気になり、小さな声しか出せなくなったこうちょうせんせいが、ひつじくんの気持ちを理解し、謝るというストーリーである。発表ではこうちょうせんせいがひつじくんにお詫びを言っている場面が選ばれ、「教師は、自分の世界観だけで生徒に強制するのではなく、生徒の立場に立って理解し育てていくことが大事である」ことが主張された。

- ・子どもの立場に立った時初めて子どもの気持ちが分かる。
- ・子どもが何を考え、何を感じているのか、遠回りになったとしても、子どもが抱えていることを理解する必要がある。
- ・何かのきっかけで気づくと、やっと子どもの気持ちが分かるようになる。

『ますだくんの1ねんせい日記』、『えんそくバス』『くまのこうちょうせんせい』のいずれも、完璧な教師像というよりは、ちょっとした間違いを犯してしまっている人間らしい教師像が描かれている。『ブタのいた教室』の星先生も、間違いこそ犯してはいないが、Pちゃんをどうするかを子どもと一緒に悩む苦しむ姿が描かれている。このように、どちらかというと「誤ったり、悩んだりしながら、それでも子どもに寄り添い、子どものために精一杯努力しようとしている教師像に対して、学生たちは

いったん子どもの立場に立って、そこから教師を見ることで、教師に対して empathy を感じることができている。

まとめ

学生の発表内容と振り返りを分析すると、①学生から見た教師②教師の視点に立ち位置を移してみる③子どもの視点に立ち位置を移し、そこから教師を見るという3つの類型に分けることができた。絵本や映画、テレビドラマという比較的視覚的要素が強い作品が今回は多く選ばれたこともあるかもしれないが、立ち位置を自分の普段の場所から教師や子どもに移すことが出来ている発表が多かったと言える。また、振り返りには他のグループへの共感の意見も多く書かれていた。

ヴァン＝マーネンは、子どもと教師の関係のあり方に焦点を当て、子どもにとってのより善い未来を見据えた教育的な振る舞いができるよう、現象学的手法を用いた教師教育を探究している。彼によれば、日常の子どもとの生活における一見なにげない出来事のうちに「重要なもの」「意味あるもの」に気づく教育的な思慮深さ (pedagogical thoughtfulness)¹²、そして、子どもと向き合っている状況における、子どもの内的な思考や理解、感情、欲求を身振りや顔つき、表現、ボディランゲージといった間接的な手がかりから解釈し、(教育的敏感さ pedagogical sensitivity)、その子ども(周りの子どもも含め)との距離をどのようにとるかという感覚と判断 (pedagogical sense and discretion) をもとに、その時点でその子にとって最も善いと思われる方向に向けて行為(教育的行為 pedagogical action)する教育的なタクト (pedagogical tact)¹³こそが、教師にとって求められる¹⁴。そして、この教育的な思慮深さとタクトを身につけるために、現象学的手法における「生きられた経験の探究」が求められている。ここで身につくことをめざされるものは、「他者に臨む知¹⁵」としての「臨床知」と近似していると言えるかもしれない。

K女子大学教育学専攻では卒業生のうち

81.6%が小学校もしくは幼稚園、保育所等に就職しており、実質的に目的養成の課程となっている¹⁶。高等学校までは「先生から教わる立場」であったが、大学に入学し、教師をめざす仲間と共に学び始めることで、「先生をめざす自分」もしくは「先生が向いているのか迷っている自分」という自己認識を獲得していく。この意味で、「先生」目線から物事を見る習慣が早くも形成されてきていると言えるだろう。この時点で、何よりもまずいったん子どもの視点に立った時に教師の存在がどのように経験されているかを考え、想像することは、多様な立場から物事を見る力を身につけ、さらに他者への empathy を強めることにつながると考えられる。

ただし、①②の発表、振り返りにおいては、子どもの立ち位置に立って選んだ場面を見るのがそれほど出来ていなかった。この点については、「その状況において、子ども(達)がどのような感情を抱き、何を考え、どうしたいと思っていて、そのうえで実際にどのように行動したか」というコルトハーヘンの振り返りの際の具体化のための質問¹⁷を援用することで、子どもの視点に立って考察を深める契機となると考えられる。これは上述の『えんそくバス』の事例からも明らかになるだろう。

最後に、学生の感想には以下のようなものが見られた。

授業形式について

- ・グループの人といろいろ話し、本の解釈をすることで考えが深まった。
- ・進行表を使うことで役割が偏らず、グループワークが苦手な人の自信につながると思う。
- ・先生の講義を聴くだけでなく、自分で考えたりグループで作ったり、他のグループの発表や考えを聞くことの重要性を学んだ。
- ・自分一人で考えていたら思いもつかなかったような視点から子どもと教師について考えられており、グループで作成してさらにそれを共有することの大切さを学んだ。

絵本などの素材を用いることについて

- ・絵本のたった一シーンでも、たくさんの解釈の幅があって、学ぶことがあったので、絵本を今後色々読んでみたいと思った。

・絵本を深く読み細かく分析をして、新しい目線で読むことができてよかったと思う。

テーマについて

- ・先生と生徒の信頼関係というあたりまえでシンプルなことが実際には難しいということを知り、そのことを伝えることができた。
- ・今までは子ども（幼児・児童）について考えることはあったが、教師について考えることは新鮮だった。
- ・授業を受けることで、どんな教師になりたいか、どんな教師が子どもにとって良い教師なのかをもっと深く考えられるようになった。

これらのポジティブな感想をも踏まえ、次年度以降も、進行表の有効活用および③の視点の移動をめざし、さらに学生の学びに繋がる授業づくりを行っていきたい。

(本発表は前川財団2016年家庭教育研究助成による助成を受けている。)

註

- 1 仲島陽一『共感の思想史』創風社、2006年、11-17ページ。
- 2 Christiane Montag, Jürgen Gallinat, Andreas Heinz, Theodor Lipps and the Concept of Empathy : 1851-1914, *American journal of Psychiatry*, October 2008, pp. 1261-1261.
- 3 Gustav Jahoda, Theodor Lipps and the Shift from "sympathy" to "empathy", *Journal for the Theory of the Behavioral Sciences*, Vol. 41 (2), 151-163, Spring 2005.
- 4 Dialogues in Philosophy, Mental and Neuro Sciences, *Dial Phil Ment Neuro SCI* 2014 : 7 (1) : 25-30.
(<http://www.crossingdialogues.com/MS-E14-01.pdf> 2017年10月28日閲覧)
- 5 尾之上高哉・丸野俊一「児童の共感性育成研究の展望」『九州大学心理学研究』第13巻、2012年、11ページ。
- 6 三國牧子「共感的理解をとおして」野島一彦監修『共感的理解—カウンセリングの本質を考える3』創元社、2015年所収、6ページ。三國は、ロジャースの共感的理解を説明するためにこの言い回しを用いている。「クライエントの履いている靴を履いてみる。そしてそこから見える世界を考える、しかしカウンセラーはずっとこの靴を履いている訳ではないし、靴の履き心地はいつも履いている靴との比較で感じる。だから本当にはクライエントの靴の履き心地は分からない」。このよう

に、クライエントに empathy を感じることに一定の自制を要求する。これは、澤田が指摘するように、「心理治療の過程とそこでのセラピストのあるべき態度」として意識してなされたものであろう(澤田瑞也『共感の心理学—そのメカニズムと発達』世界思想社、1998年、16ページ)。

- 7 吉田章宏『絵と文で楽しく学ぶ大人と子どもの現象学』文芸社、2015年。
- 8 Garret, H. J. & Greenwalt, K. (2010). Confronting the Other : Understanding Empathy. *Current Issues in Education*, 13 (4).
- 9 Barr は、障害をもっている生徒への教育実習生の態度についての研究の中で empathy にも触れているが、empathy を育てるという視点での研究とは言えない Jason J. Barr, Student-teachers' Attitudes Toward Students with Disabilities : Associations with Contact and Empathy, *International Journal of Education and Practice*, 2014. 1 (8) : 87-100.
- 10 マックス・ヴァン＝マーネン著、村井尚子訳、2011年、89-125ページ。
- 11 本授業は筆者が参加したヴァン＝マーネンのアルバータ大学大学院での授業 Film Class「映画における教育的関係」を参考している。ヴァン＝マーネンの影響を強く受けた Friesen と Saevi らは、映画や文献を用いて、教師と子どもの教育的関係について問い、考察する一連の授業を行った (Norm Friesen & Tone Sævi (2010) : Reviving forgotten connections in North American teacher education : Klaus Mollenhauer and the pedagogical relation, *Journal of Curriculum Studies*, 42 : 1, 123-147)
- 12 マックス・ヴァン＝マーネン著、村井尚子訳『生きられた経験の探究—人間科学がひらく感受性豊かな〈教育〉の世界』ゆみる出版、2011年、27ページ。
- 13 Van Manen, Max, *Pedagogical Sensitivity and Tact* (未公刊)
- 14 村井尚子「保育者の専門性としてのタクトとその養成に関する一考察」『保育学研究』39 (1), 44-51, 2001と参照されたい。
- 15 田中智志「他者に臨む知」臨床教育人間学会編『他者に臨む知』世織書房、2004年。
- 16 本データは平成28年3月卒業生のものであるが、例年ほぼ同様の就職状況となっている。
(<http://www.kyoto-wu.ac.jp/career/jisseki/gakubu/kyoiku.html> 平成29年5月19日最終閲覧)
- 17 F・コルトハーヘン著、武田信子監訳『教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社、2010年、136ページ。

